

仏教説話画と絵解き

——「道成寺縁起」絵巻の展開——

明治大学教授
人文科学研究所長

林 雅 彦

林でございます、よろしく願います。

只今、田中徳定先生から、過分なお言葉を頂戴いたしましたして、ちょっと恥ずかしい気持ちがありました。だいそれたことをやっているわけではございませんで、ごく興味本位で絵解きを研究しているだけです。

さて、日本の絵解きに関する現存最古の記録は、九三一年に、今は廃寺になってしまいました嵯峨野の貞観寺というお寺で視聴したという、十、十一世紀になってから『李部王記』の中に書き留められているものです。分かりやすく言ってしまえば、絵解きという文芸・芸能は、視聴覚説教だと考えていただければよろしいかと思っております。

それから、さきほど高橋文二先生のご挨拶の中で、「仏教文学とはなにか」というお話をうかがったのですけれども、私は、経典類は仏教文学集ないしは仏教説話集ではないかと解釈・理解をしております。その中に、絵を使っ

て説き語るといふ文芸・芸能として、絵解きが存在するのですが、国文学研究の方では、なかなか一分野として認められないという事情がございます。即ち、説話文学の一部のように思われていまして、私はそれに抵抗して「絵解き」の方が古くからその呼称が存在するんだということを主張しているんです。「説話」とか「説話文学」という語彙は、明治以降に作られた言葉ですから。

前置きはこれくらいにいたしまして、以下絵解きの具体的なお話をさせていただきますと思います。

後程、黒田日出男先生が大変大きなテーマでお話なさいますので、どういう内容か大いに興味があるのですが、私の方は小さなテーマで、しかもみなさんのお手元にいっぱい資料を差し上げたくんですけれども、「道成寺縁起」絵巻に纏わるお話をさせていただきます。この絵巻は長い年月絵解きされてきましたし、能にも「道成寺」と呼ばれている曲目がありますし、江戸時代になりますと、長唄とか歌舞伎の世界でも、たくさんの道成寺物という作品が登場してまいります。よく演じられますものに、長唄の「京鹿子娘道成寺」というのがありまして、これはもう、毎年どこかの劇場で必ず演じられます。また能の「道成寺」に関しましても、国立能楽堂をはじめとして、各流派の能楽堂でこれまた毎年演じられているという具合です。で、能及び歌舞伎関係の研究は専門家の方々がたくさんいらっしやいますので、とてもこわくって、私は今までほとんど触れておりませんが、いずれはやらなければいけないと思っております。

絵解きに使われる絵画、日本で絵解きに使われている絵画は、多かれ少なかれ仏教にかかわるものということで、「仏教説話画」というふうに呼んでいますけれども、美術史の分野では、「仏教説話画」という語彙が、昭和三〇年代頃から盛んに使われるようになりました。文学の方でも、説話文学という言い方が、大抵昭和三〇年代からだんだん広まってきました。私の恩師の西尾光一先生とか早稲田大学の国東文麿先生といった方々によって、説話文学の

研究が進められていったわけなんです、仏教説話画研究の領域でも、だいたい同時期急速に進展いたしました。

絵解きに則して見ていきますと、レジメ一枚目の真中あたりの、「説話画の諸相」をご覧下さい。内容と形態の両面から分類出来ます。経典類は、「経説」という形で一つのグループにまとめることが出来るでしょう。それから「仏伝」という括りがございまして、お釈迦様の伝記。日本では「涅槃図」という形が圧倒的に多いのですが、これも江戸時代になりますと、もじりの「涅槃図」というものがいっぱい出てまいります。「在原業平涅槃図」とか「日蓮聖人涅槃図」「芭蕉涅槃図」、最たる物は、伊藤若冲の「野菜涅槃図」と言って、大根が横になっていて、回りに野菜がたくさん泣き悲しんでいる姿が描かれているようなものがあります。韓国あたりですと、お釈迦さんの伝記のなかから、八場面大事なものを抜き出した、「釈迦八相図」と呼ばれているものが数多く見られます。これは日本にもないわけではないのですけれども、圧倒的に「涅槃図」が多いのです。さらに三つ目に、各宗派の「祖師・高僧伝」を絵画化した説話画がございます。四つ目が「寺社縁起」という群で、名刹大社の縁起・由来を絵画によって説いたものです。五つ目が「英雄最期譚」、例えば安徳天皇は英雄ではないのですけど、軍記から題材を得たものとして、英雄の最期という中に「安徳天皇一代記凶絵」という、下関の赤間神宮に伝わっている説話画があります。ご存知のように赤間神宮というのは、幕末まで阿弥陀寺と呼ばれていまして、安徳天皇をお祀りしているお寺だったのです。そして六つ目が、今日お話する「道成寺縁起」あるいは「刈萱と石童丸」のお話といったもので、これまでの五つの分類に入らないものを、「物語・伝説」というふう括っております。

また形態の上ではまず壁画。五世紀ないし六世紀頃に作成されたと言われていますインド南部・アジャンターの石窟寺院第十七窟に「五趣生死輪」と呼ばれる絵画があるのです。その他にも、中央アジアのキジル千仏洞には、お釈迦さんの一代記を絵解きしている壁画が残っております、我々には大変ありがたい資料であります。続いて、

障屏画という形で、屏風あるいは障子ふすまに描かれた絵。次に、持ち運びに便利な絵巻物があります。さらに、掛幅絵という形態があるのですけれども、これは壁画の変形と考えていただけでよく、絵巻物と同様に、持ち運びが便利な説話画です。しかも絵巻物に比べて、多人数の人を一度に相手に出来るということで、絵巻物とともに鎌倉時代以降盛んに作られます。それから、ものによっては額絵という、紙芝居のもとになったような、二十枚とか三十枚といった多くの絵画を用いる形態のものもございます。

因みに、インドで現在でも行われている絵解きのひとつに、大変長い横断幕、この会場の演壇の両端ぐらいまである絵を広げて、男女が一晩中絵解きをするというものもあります。途中で疲れたりすると、その間に民謡とか歌謡を謡うというもので、かつて朝日新聞の社屋の跡に有楽町マリオンが出来た時、そのこけら落としにインドから親子の絵解きが来られて演じられました。それから紙芝居のような形のもの、十枚ぐらいの絵を使って、伴奏楽器を手にしながら絵を解くものも、インドには伝わっています。さらに、縦型の、つまり、絵巻のような形ですが、その絵が縦に展開していくというものもあります。今から十年ぐらい前でしようか、インドからやって来て、原宿のラフォーレで実演されたことがありました。その時、絵巻物というものが東アジア独特のものかというところではない、ということを知りました。もちろん皆さんよくご存知のように、中国にもたくさんさんの絵巻物がありますけれども……。

ところで、道成寺は絵巻物を用いた絵解きを現在もしている唯一のお寺さんですね。新潟県の新潟市上戸上ていじょうというお寺がございませう。ここは良寛さんの五合庵で大変有名な寺ですが、そこに「酒吞童子絵巻」の三巻本があります。かつては小屋掛けをして、そこで絵巻物を広げて扇の柄で絵解きをしていた、という例もあります。二十何年かぶりである人が絵解きをして下さるといふ話をうかがって楽しみにしていたのですが、その直前に病院

で亡くなられたという幻の絵解きでもあるのですが、たまたまどなたかが撮影したビデオが残っておりまして、それを拝見したことがございます。

さて、道成寺に伝わる安珍清姫のお話といえば、皆さん知っていらっしやる方が多いと思うんですが、『本朝法華驗記』という往生伝の巻下第二百二十九話に出てきます。「紀伊国の悪女の話」というタイトルがついておりまして、これがよく知られている安珍清姫のお話の元になった、現在一番古い話なのです。奥州から二人の坊さんが紀伊国牟婁郡にやってきまして、宿を借りるのですけれども、その女主人のことを寡婦やもめと書いているのですね。若い清姫のイメージではなくて、もっと年のいった人妻と考えていいと思うのですが、二人の僧はその家へ泊めてもらいました。夜中になると、この寡婦が年若い僧侶の寝ている所へやってきて、「一目見たときからあなたのことが好きになった」と言い、思いを遂げようとするので、若い僧侶は、「自分は熊野へ参詣をしなければいけない、精進潔斎してここまでやってきた身であるから、その熊野のお参りが終わつたならば、あなたの言うとおりに従いましょう」と言うのです。その場まかせの言葉を吐いたわけなんですけれども、女主人はその通りに思っ待っているんですが、二人の僧侶は逃げ帰ってしまいます。それを知つた寡婦は、自分の部屋に籠もつて死んでしまいます。その後、部屋の中から五尋いっぴろの大きな毒蛇が出て来て、逃げていった僧侶たちの後を追いかけていきます。二人の僧侶は途中で毒蛇に身を代えた寡婦に気が付いて、道成寺に逃げ込み、若い僧侶は鐘の中に隠れたんですね。毒蛇と化した寡婦は、そのしつぽをもつて鐘の収められている建物の扉を壊して、鐘の龍頭という部分に巻き付いて、三時みときばかりといえますから、約六時間ぐらいかけて鐘ごと焼いてしまう、という話なんです。寺僧たちがあとでその鐘をどかしてみたら、中からは、若い僧侶の灰と墨ばかりが出て来たという。これは後代の話とちよつと違うのですが、現在の道成寺の絵解きでは、鐘を除けてみますと、そこから真つ黒焦げの安珍が出てきたと説いています。たしか

に猿が黒焦げになったような姿が絵巻の中には描かれているのですね。その後、道成寺の僧の夢枕に立ちまして、自分と女人とは、今まだ浄土へ生まれ変わることが出来ないの、是非『法華経』供養をして欲しいという話をするのですが、まだここでは平安時代の後半、末期と言ったらいでしょうか、一一〇〇年頃の時点では、時代設定もありません。それから、僧侶の出身地も書かれていないし、もちろん僧侶の名前、安珍なんて名前は出てこないわけです。それから女性が清姫だということも出てまいりません。

「安珍」の名前は、比較的夙くて、鎌倉時代の『元亨釈書』という書物の中に、「鞍馬の僧安珍」と、奥州ではなくて、鞍馬の僧というふうに出てまいります。「清姫」の呼称は、ずっと下って江戸時代まで待たねばなりません。一七〇〇年代に、「道成寺現在蛇鱗」という浄瑠璃が作られました。それが初演されたのは一七四二年ですが、その時に初めて「清姫」という名前が出て来るのです。ちょっとこのことを頭のどこかに入れておいていただければ、幸いです。

「道成寺縁起」に先行する「華嚴宗祖師縁起」という、一般的に「華嚴縁起」と呼ばれている絵巻物があるのですが、ここには朝鮮半島の新羅から中国に渡った義湘という大変立派な僧侶の話が出てまいります。本来新羅の元暁と義湘という二人の僧侶の行状を描いているのが、この「華嚴縁起」絵巻で、現在残っているものは残欠本だと言われています。鎌倉時代に明恵上人は元暁に大変惚れ込んで、その著作を次々と写し取っていく作業をしていますけれども、義湘の方は日本ではそれほど知られていません。しかし、朝鮮半島へ行くと、義湘の存在というのが非常に大きいことが分かります。

その「義湘絵」の部分を見ていくと、義湘が中国から新羅へ帰ろうといういよいよ別れの時に、一人の女性、善妙という女性が船まで見送りにやってくるわけです。ちょうど船と女性との間、船寄りの所に、画の中の詞と書き



図1 「華嚴宗祖師絵伝」[義湘絵] 卷3 鎌倉時代(13世紀)

ますけれども、画中詞でその絵の説明が施されています。次に、義湘の乗った船が港を離れていってしまい、シヨックを受けた善妙の悶え苦しむ姿が描かれています。そこにも、嘆き悲しむ善妙の様子が、画中詞の形で記されています(図1)。画中詞というのは、絵の説明とか、場面の解説、それから簡単な登場人物の会話などの表現に用いられています。さらに、その善妙が海中へ飛び込んで龍と化し、義湘の乗った船を背に乗せて、無事に新羅の国へ送り届けた、というんです。これが、どうやら「道成寺縁起」に大きな影響を与えたと夙くから言われています。即ち、江戸時代の屋代弘賢という学者が『道成寺考』という書物を書いておりました、その中で、中国の『宋高僧伝』にこの義湘の話が出てくることを指摘しています。そして、善妙は龍となって善行を施した話だと解し、そのモチーフを悪の方を持って行ったのが、この「道成寺縁起」だ、という解釈を示しています。

「道成寺縁起」の上巻冒頭を見ていただくと、まず詞書があつて、ここではじめて時代が設定されます。「醍醐天皇の御宇、延長六年八月」の頃だと。そしてその後で、「奥州より見目よき

僧の淨衣着たるが、熊野參詣するありけり」と、僧は奥州の出身であると述べています。それから、舞台は紀の国牟婁の郡真砂まなごという所になりまして、女性は、その真砂の清次庄司きよつぐという土地の名家の寡婦なんです。現在、牟婁郡真砂の地へ行きますと、これが清姫の館跡だという、礎石まで残っている場所があるのですが、山の中にそういう場所がありますし、その前を流れている川に清姫ヶ淵と呼ばれている淀みがあって、夏の時期そこへ行きますと、子供達が水浴を楽しんでいます。在地伝承の中でそういうふうに展開していきます。最前述べましたように、「道成寺縁起」でも、冒頭の一節に清次庄司と申す人の嫁だと書いてあるんですね。人妻だと出てくるのですが、在地の江戸時代に作られた「清姫由緒図絵」などの絵巻物や、同じく江戸時代の歌謡の類には、主人公は一三歳の娘というふうに、後世には伝えられていくのです。それから、現在伝わっている絵解きの台本でも、江戸の末期のものはもちろん、道成寺が出来て一〇〇〇年ということ、昭和四年（一九二九）に鐘巻千年祭という記念祭をやったんです。この時、大勢の参拝客があると当て込んで台本を作りましたが、それには「この部分はこう話すように」とか、「ちょっと止めて間まをおけ」とか、「大声で」という具合にト書きが付いているんです。このように、道成寺でも主人公は一三歳というふうに伝承されてきております。レジメにはかつて本堂で絵解きをしていた頃の写真を参考に掲げたのですが、御覧のように、絵巻を斜めの台の上に乗せまして、くるくると巻き取りながら絵解きをしていくわけです。今は縁起堂という建物に移りましたが、現在もそこでこういう形の大型の台を用いて絵解きをしています。

「道成寺縁起」上巻冒頭部分の絵を見ていただきますと、ここでも画中詞を用いて会話を書き留めています。絵の順序としては、家の方が先で、その後旅立っていく安珍を清姫が見送る、そして「間違いなく帰りに寄ってくださいね」と言っている会話が交わされるんです。以下にも、会話や登場人物の説明、地名の説明など、画中詞

が盛んに出てまいります。それから松の木の右側にいる人物の辺りを見ますと、浄衣を着て、脛中、脚絆はばきを巻いていますが、こういう姿は当時の熊野参詣者たちの旅の服装と考えられます。絵巻の中をずっと見ていきますと、登場してくる男の人はみんなこういう格好をしているんですね。現存の「道成寺縁起」が作られたのは、一五〇〇年代後半なのですが、近世に至っても、おそらくこういう出で立ちで参詣をしていたんだろうと思われれます。それから左端の方を見ますと、清姫、とりあえず清姫と言っておきますけれども、その清姫が、熊野街道を往き来する人々に「二人の僧を見ませんでしたか」と尋ねます。この相手の先頭は先達の山伏、そしてその後は旅人、その後には笈を背負っている人物が強力と呼ばれる荷物を運ぶ人、という組み合わせで旅をしていたんだろうと推測出来るんですね。

次のレジメを御覧いただきたいと思います。清姫は、「その二人の僧侶は、もうずっと先へ行ってしまった」ということを道行く旅人から聞くわけですね。そしたら途中で頭にかつときまして、裏切られたというので、脛もあらわにしながら草履が片方脱げたまま二人を追いかけっていきます。馬の手綱をとっている人、先達の右側の画中詞は、本当は清姫のすぐ脇に書いてあるのいいのですが、「うらなしもおもてなしもうせう方へうせよ」と、そんなことを言ってもらえないと追いかけていくわけですね。それを見た先達が、「ここなる女房のけしきごらん候へ」、つまり、「あの女房の様子を御覧下さい」と言っていると、馬上の女性が、虫除けのための虫垂れ笠というものをかぶっていますが、山蛭が上から落ちてきますから、その山蛭を防ぐため虫除けの虫垂れ笠というものをかぶっています。その女性が、「誠にまあなあおそろしの気色や」、「ああ、恐ろしい。怖い女の人ね」ということを言うわけですね。このように、ここでは作中人物の会話を記しています。彼らは、物語の享受者自身、即ち、道成寺へ参詣してその折に絵解きを見る人々で、場合によっては物語、作中の人物にもなり得るような人々、自分だって作中人物のひとりだとい

う追体験が行われるのではないかと思うのですが。多くの人々の絵解きの場への積極的参加というものを、こういう表現の中から読み取ることが出来るのではないのでしょうか。それから、そのちよつと左の方へ縮くと、しゃがんでいる人がいるのですけれども、絹張りの脚絆の括りがほどこけてしまつて難儀をしており、どうやって履きなおそうかという場面なのですが、今だつたら靴くつがついていて、それが外れてしまったのか、壊れてしまったのか困っている旅人の姿が描かれています。どうやら「道成寺縁起」の中に描かれた人物というのは、折々の物語の享受者でもあり得るような、私たちもその場面に今すぐにも入れるような雰囲気というものが、かつてあったのではないのでしょうか。絵解きをする人と、見聞する人と、そしてその場というものが、非常に重要な意味を持つてくる。絵解きへの参画と言つたらいいでしょうか、そういうものを絵の中に読み取ることが可能なのではないかと考えられます。

さらに向かつて右に縮いていきますと、右端の方に「切目五体王子」と書いてあります。それから髪を振り乱した清姫が追いかけていくその次の場面の左上の方には、「ここは上野という所」とあつて、熊野九十九王子、つまり、熊野街道は日高川の近くにだんだんなつてくるんですけれども、そのあたりの熊野王子社名が常套語句のように出てきますので、実際に旅をした人々には、「ああ、あそこは最前歩いてきたあの場所だ」と確認し得るような描き方がされているんです。その他にも、「何々という所」「ここは何々」というような言い方が画中詞になつておりまして、やっぱり絵解きを想定しないと理解出来ないような場面というのが見られるのです。この辺りから清姫はだんだん髪の毛を振り乱して蛇になつていくわけです。次は、「南無金剛童子助けさせ給へ」と、安珍は笈も数珠もすべてかなぐり捨ててなんとか逃げようとする場面です。安珍が助けを求める金剛童子というのは、熊野権現の眷属神の一つなんです。熊野権現に仕える神様ということで、ここに当時大いに流行つた熊野信仰の一つの姿が見られ

るのではないかと思えます、熊野の眷属神に擁護を頼むというような。そうすると、その次の場面に、今度は胸から上が蛇体になった清姫が「南無観世音、この世も後世も助け給へ」と唱える画中詞が記されています。ここでは観音信仰。道成寺は千手観音がご本尊ですから、そういう道成寺と熊野権現という二つの信仰の場が、それとはなしにこの物語の中に描かれていて、信仰の伏線となっているのではないかと考えています。

その熊野参詣の復路、帰り道。余談ですが、大学駅伝、箱根駅伝で駒澤大学チームは常に有力ですけれども、私は明治大学に勤めて二一年になりますが、その間一度だけ明治大学は本選に出たことがあるだけです。皆さん、往路・復路という言葉をよく御存知だと思います。ついつい絵解きを勉強していますと、皆さんの関心を引くために、あまり本筋に関係ないことを口に出してしまうわけです。絵解きには、そういう要素があるのです。

この復路に塩屋王子が出てまいります。実際に一昨年、塩屋の付近を歩いたことがありますが、ちょうど台風が接近していて、雨が下から吹き上げてくるような感じでした。会話で構成されてきた「道成寺縁起」が一転して、ここから先は語り手の側に立った地の文の画中詞という形で、説明的な画中詞がたくさん出てまいります。それは、語り手という存在をこの辺で意識しており、絵解きを前提としないと、理解しにくいという気がいたします。

安珍はまもなく日高川のほとりにやって来ます。この場面では、船頭が舟の上でじっと辺りを見ているんですね。後から来る女の人を絶対に乗せないでほしいと、船頭は安珍に頼まれます。おそらく、安珍から袖の下を貰っていると思うのですが……。じっと見ている人の姿というものは、語り手の、あるいは絵解きを聞いている人の姿のような気がしないわけではないのですね。第三者的な立場と言えます。上巻の最後の場面はクライマックスで、仕方なく清姫は角を一本生やした大毒蛇となって、日高川を渡っていきます。たまたま一、二年ほど前に熊野街道の一部を歩きましたら、その時まさに「道成寺縁起」に出て来るような、道成寺がだんだん近づいてくるあたりの日高

川に小舟が幾艘か浮かんでいました。台風の後でしたから、かなり水嵩がありましたけれども。波を掻き分けて泳いでいく蛇の姿を、現在の道成寺の絵解きでは、「角が一本、龍ではないんですよ。蛇なんですよ」というふうに説明をしているんですね。画面を見ると、角が一本の近世の絵巻物もあれば、角が二本という絵巻物もあるのですが、角が一本というのが、「道成寺縁起」そのものの大毒蛇の姿なんです。

下巻は冒頭部分に、本来の「道成寺縁起」にふさわしい縁起由来が出てまいります。文武天皇の勅願によって、紀の大臣道成公が作った寺であり、御本尊が千手観音であると、ほんのわずかなんですが、縁起由来が語られているのです。本当はこの部分を中心であって、初めて「道成寺縁起」であるべきなのですが、因みに、京都精華大学の田中貴子さんは、これを「道成寺縁起」と言っではいけないと。この絵巻は道成寺説話とか道成寺物語と言っべきであって、縁起、由来がほとんど描かれていないではないかとおっしゃっておられます。私もそう思います。

くり返して申しますと、下巻はまず本文、詞書がありまして、その後絵が連続して出て来ます。その絵の内容はというと、道成寺の境内と、それからかつて昭和初年だったでしょうか、台風の時に、山門に通じる道成寺の六二段の石段の途中まで水に浸ったという、昔はそうとう水が出た所らしいのです。今とはちよつと形が違いますけれども、山門や伽藍が描かれています。さらに續きますと、助けを求めてやってきた安珍を、僧侶達がどうやったら匿えるのか議論している場面になります。ここから下巻もまた画中詞がものすごくたくさん出てまいります。

絵が自立していくと、絵だけで物語を展開していくという性質を有する絵巻物。一例をあげますと、かつて「鳥獣戯画」のような絵だけで展開していくものが作られていますから、絵だけ、あるいはわずかな画中詞を書き込むという形で、あくまでも絵を以て語らしめていくわけです。下巻は道成寺の僧たちの会話を記した画中詞が非常に多いのです。また、例話も引いていまして、生田の森の鬼女の話が突然そこに出てきます。その後、清姫のこと

を暗に説いていくことに使おうとしたんだろうと思うのですが。このあたりを見ていると、絵を読むという行為が大事になってきていることに気付きます。即ち、ここでは、語り手ではなく、聞き手あるいは見る人の側の捉え方のバリエーションを読み取ることが出来るのではないのでしょうか。

大蛇がやって来て、鐘を三巻き半するという下巻のクライマックスを迎えます。安珍を追って道成寺にやってきた大蛇は、安珍の隠れた鐘を見つけ、その鐘を三巻き半して鐘ごと安珍を焼き殺します。それから、鐘が冷めて、寺僧たちがその鐘を倒してみると、中から真つ黒焦げの安珍が出てくるという場面で、現在の道成寺の絵解きでは、昭和四〇年代に大ヒットした「骨まで愛して」という歌謡曲のタイトルを出し、「これを言うんですよ、『骨まで愛して』と」。そこで笑う人々は、大体五〇代後半以上の人。若い人は全然何を言っているのか分からないという顔をしています。このように、絵巻は、前に述べました『本朝法華験記』とは少々異なる場面（画面）展開を見せています。

最後の場面では、『法華経』の書写供養を行うと、蛇と化した安珍と清姫は、兜率天浄土と刀利天浄土へそれぞれ生まれ代わることが出来たというので、大団円になるわけです。

台本を皆様のお手元に差し上げればよかったのですが、只今台本がないままのお話で誠に申し訳ございません。以下、飛ばしながらお話を進めていきます。室町時代物語、いわゆる御伽草子の『いそぎき』は、「うわなり打ち」という、本妻なり正妻が後妻あるいは正妻以外の女性を苛めるという話でよく知られる作品です。その挿入話として、「昔真砂の庄司が娘は、熊野詣での山伏を思い掛け云々」というふうに出てきます。近世の初頭あたりでは、真砂の庄司の娘と熊野詣での山伏という形で、件の道成寺譚が一般に喧伝されるようになっていたということ、この作品で窺い知ることが出来ます。因みに、赤木文庫蔵の『いそぎき』は、寛文年間、つまり、江戸の初め

の頃に成立をしていますから、それ以前から既に若い男女の愛憎劇として広まっていたのです。こうして、だんだん話柄が変わっていった、現在の私どもが知っている話に近付いていったわけです。

近世には、「道成寺縁起」享受の例がいっぱい残っておりまして、例えば、随筆集のひとつ、伊藤梅宇の『見聞談叢』（元文三年（一七三八）序）という作品を見ますと、ここには「道成寺縁起」の後日譚が記されています。即ち、最初の鐘は焼けてしまったので、二度目の鐘を造ったのですけれども、道成寺を離れて紀州の民家に伝わっていたのですが、その二度目の鐘もあんまり幸せを呼ばないというので、天正一六年（一五八八）五月に京都の妙満寺へ入りました。今年（二〇〇一年）春の中世文学会は、この妙満寺へ文学散歩を実施したということですが、その時、その僧侶の方が簡略に件の鐘の物語をされたということでした。私はその時、所用で行かれなかったのですが、二度目の鐘というのが、実際に妙満寺にごさいますして、江戸時代それを江戸の市中で御開帳しているのです。そして丁寧なことに、レジメに掲げましたように、東北大学の狩野文庫の中に『道成寺鐘今在妙満寺和解略縁起』というタイトルの絵入りの略縁起が収められております。これは江戸で文政年間だったでしょうが、妙満寺が御開帳をやった時に、妙満寺の中では売り物としては、この道成寺で造られた二度目の鐘が人を呼ぶのに大変都合だということで、刊行したのでしょうか。

それから、百井塘雨の『笈埃随筆』の中には、わざわざ「道成寺鐘」というタイトルがついている文章が見られます。塘雨はある時、熊野三山にお参りをしたところ、その帰りに小松原という所へやって来ました。そして、道成寺にお参りをした時、ある茶屋に入ったところ、鐘の話が出たんですね。道成寺に鐘がないのはどうしてかという話になって、「二度目の鐘は今、妙満寺にある」と言ったら、茶屋の主人が大いにふくれっ面をして、「そんなことはない、鐘は焼けてしまった」と。二度目の鐘なんですが、焼けてしまったと茶屋の主人は勘違いしている。塘雨は、

よく事情を知っていたものですから、旅人たちに「もしよかつたら、熊野のお参りの帰りに、京まで足をのばして、妙満寺へ尋ねて行って、鐘を見たらどうか」と言ったのです。

「日高川草子」とか「賢学草紙」という、「道成寺縁起」の異本と言われているものがあって、江戸時代かなりよく知られていたようです。

面白いのが、浄土宗の坊さんで、自分で金谷上人と言っているのですが、その人の著作に『金谷上人一代記』という日記のような、道中記のようなものがあります。文化六年（一八〇九）八月一日を見ると、吉野・熊野で修行した後、帰りがけに道成寺へ寄った折り、清姫の絵巻を見せてもらって、その時、「醍醐天皇の延長云々」と絵解きの始めの部分の口調を書いておりまして、本堂で縁起（絵解き）を聴聞したのですが、そんなのは女子供の騙し物だと批判をしているんですね。因みに、金谷上人という僧は、豚を犬の代わりに連れて道中を歩いたりとか、狼にその豚が食われてしまって、自分は命からがら木の上に乗っかって助かったとか、行く先々で金がなくなると、絵心が大変ある人なので、宗祖・法然上人の絵伝を描いては一宿一飯の義理を果たした、というようなことが記されています。実際に全国各地に金谷上人の手になる法然上人の絵伝が残っています。このように、絵解きを受けたという話が見られますし、ここには掲げなかったのですが、板尾の八尾左衛門という人物が『御熊野参詣道中記』というのを残しています、延享四年（一七四七）に道成寺へ行って縁起を聴聞した旨書いておりまして、百錢、錢百錢払うと、絵解きをしてもらえた、というのです。

江戸時代の出開帳については、斉藤月岑の『武江年表』中にも出て来まして、文政元年（一八一八）、六十日間回向院で行ったとあります。回向院は、江戸時代出開帳が盛んに行われた場所なんですね。その時に展示された「道成寺縁起」を写したと書いてあるんですが、道成寺に伺いますと、現在道成寺にある五幅の掛け軸の「道成寺縁起」

は、この出開帳の時に絵解きをするために作られたと伝承されているそうです。それから、屋代弘賢の『道成寺考』（文久三年（一八六三））を見ますと、実は道成寺の話というのは、千手観音の申し子の髪長姫の話が、本来の道成寺の縁起であるという。ちょっと書いておきましたように、『安珍清姫略物語』というのが出されているのですが、これもまた文政元年、回向院での出開帳時に作られたものです。『道成寺考付録』という記述部分に、「華嚴縁起」絵巻の「義湘伝」に触れていて、「道成寺縁起」との比較がなされています。さらに、『俳風柳多留』を見ると、道成寺物語という形で、たくさんの川柳が作られておりますが、レジメにはその中からいくつか抜いておきましたので、御覧下さい。

レジメの六枚目を御覧頂きたいのですが、雑和讃と呼ばれている諸々の物語的な和讃が江戸時代盛んに作られていますけれども、「安珍清姫和讃」というものも作られていて、かなり広く流布していたようです。現在、福島県白河市の根田という部落では、「安珍唄念仏踊り」というのが伝承されています。しかも台本も残っていて、それによると、安珍は白河郷で生まれて、やがて熊野へお参りをする事になったという話なのですが、一三歳の清姫のことが出てくるのです。即ち、真砂の庄司の娘は、毎年行くたびに、「いずれあなたと結婚しよう」と言われているので、少女の方が一三歳の時その気になった、という内容です。落ちが付いておりまして、その後この白河の安珍の家では、男子が生まれた場合、成人するまでは熊野へ参詣をしないようにと伝承されてきたそうです。

面白いのは、山城の国相樂郡上狛村という所に伝わる「日高踊り」という風流踊りと、小泉八雲の「日本の古い歌謡」に載っている「鐘巻取り歌」の詞章がかなり一致していることです。果たして小泉八雲が、この山城の「日高踊り」を知っていたのかどうか分からないのですが、おそらく似通った歌謡から取ったとおぼしきものです。

それから実は一番お話をしたかったのが、「近・現代における『道成寺縁起』の享受と解釈」及び「近・現代画家

が描く『道成寺縁起』です。近代になって早くも、島崎藤村の『若菜集』（明治三〇年～一八九七）に収められた「おきく」という詩の中には、歌舞伎に登場する有名な女性の、皆さんが知っている「梅川忠兵衛」の梅川だとか、お七、高尾という名前が出てきます。一節に、「かなしからずや清姫は、蛇となれるもこひゆゑに」というふうにあるところを見ると、藤村も道成寺の話に大変興味をもっていたようです。

レジメを見ていただきますと、同じく藤村の『春』（明治四一年～一九〇八）という小説の「四十四」章に、青木という友人をして、主人公の岸本捨藏を他人に説明する時に、「安珍清姫——、あれを逆にしたような人なんです」と、ある女性に対する一途な思いを抱いた主人公のことを書いているのです。ほんの一行ぐらいしかないのですけれども、「おきく」という詩の存在と併せ考えると、藤村が安珍清姫の話を、『春』の中でも主人公の人となりを描くにあたってうまく使っていると言えます。

中里介山『大菩薩峠』（大正二年～一九一三）「龍神の巻」の中でも、清姫の帯と呼ばれている雲が出たら、土地の人々はただちに自分の村の神社へ行つて、その雲を見たことを宮司に告白しないと悪いことが起こるのだ、と設定しています。ところが、この雲を見た女性が旅籠屋の女将さんなんですが、別の土地からお嫁に来ているので、そのことを知らなくて、そのために既に盲目となってしまった主人公机龍之介がやって来て、次々と殺人事件を起こすわけです。興味深いのは、ある人の言として、「この紀州の女というものは、なかなか情念の強いものがございますよ」と記しています。その少しあとには、「一旦思い込むと、それ鬼になった、蛇になった」とあります。これは「日高踊り」や小泉八雲の作品の中に「蛇になり」という文句があるのですが、よく知られるこの文句中を中里介山が、龍神村の話の部分で使うんですね。執念深い紀州女を、道成寺譚の中に出てくる清姫に肩代わりさせて語っていくという方法を取っています。因みに、中里介山は龍神村に一度も行つたことがないということなんです。

れども、それでこれだけの物語を書き上げていくのです。以下は、各自お読み下さい。

三島由紀夫の「道成寺」(昭和三年(一九五七)、これは『近代能楽集』の中に収められています。その中で、清子という女性が絵とか美について古道具屋の主人と語るといふ場面の部分で、女性の名前が清子というので、皆さんはすぐにぴんと来たと思うのですが、清姫から清子という名前を付けているわけです。その彼女が買いたいという古道具屋にある洋服ダンスの取っ手が、道成寺の鐘を表現したものになっています。その洋服ダンスの中で死んだ男の話題が出てくるのですが、男の名前は安さん、安珍の安という字です。安さんはかつての恋人だった女性の持ち物だったダンスの中で殺されていたのです。何を言いたいかというと、実は三島の作品の中でも「道成寺」は、「道成寺縁起」と同じく、男性の影が非常に薄いのです。女性の方が強調される代わりに、その相手役である安さんが非常に希薄な存在として描かれています。

次に、有吉佐和子の『日高川』という昭和四年(一九六六)に刊行された小説を見てみましょう。ここでも女の情念ということで、道成寺の清姫の話と重ね合わされているのです。原文を後ほどお読みいただきたいと思いますが、道成寺の先代住職、現住職の絵解きそのものを引いています。有吉は、この絵解きの模様をかなり詳しく書いておられますので、これまた後ほどお読み下さい。有吉は、清姫の情念というのを絵解きしているんだと、そして、清姫と作中の女性とが共通の問題を抱えるのだと見做しているのです。和歌山県出身の作家、中上健次、彼は残念ながら癌のために思い半ばで亡くなってしまいましたが、『鳳仙花』(昭和五年(一九八〇)刊)のヒロインについて、情念の強い紀州女として描いております。即ち、ヒロインは龍造がいるのにも拘わらず、別の男性とも深い関係になるのです。ヒロインは今の相手繁蔵という人物が「のぞむなら清姫にでもなって焼き殺しさえしてやると、一人声を殺して笑った」というふうに、中上健次の作中でも、道成寺の清姫が紀州の女性の代名詞のように使

われています。この中に和歌山県出身の方がいらっしやれば、もしかすると、懇親会の席上で、「いや違う」というふうには叱られるかもしれないのですが……。以前に和歌山県の方々に叱られていますので、余り怖くない。というのは、熊野比丘尼の絵解きについての話を熊野地方でした時に、「熊野比丘尼という尼僧たちはそんなに悪い女の人ではない」というふうには叱られて、それから何年かたって、また別の学会のシンポジウムの時に、「今日は前のようには叱られないでしょう」と言ったところ、地元の民俗学を研究している方からまたお叱りを受けてしまった、というような出来事がありました。ちょっとよけいな事なんですけれども。

さらに、山田風太郎の『魔界転生』という小説、成立年代をうっかりしてしまいました、「剣道成寺」の中にもかなり長く道成寺の話が出て参ります。配布資料をあとでお読み下さい。

さて、次に相模女子大学の志村有弘氏が最近編集された『怪奇・伝奇時代小説選集6』（平成一二年△二〇〇〇）についてお話いたします。最近怪奇とか伝奇という分野が大変うけていまして、ある出版社でこれに似たようなタイトルの論文集を出しており、そこに水木しげるさんも必ず書いていらっしやるのですが、私もその中の一冊に道成寺のことを書かせていただきました。志村先生のこの編集された中には、大岡昇平の「清姫」（昭和二七年△一九五二）以下四篇の道成寺物が収められております。それぞれの小説について、末尾で志村先生の解釈が簡潔に加えられています。これらも、いずれもう一回洗い直してみたいと思っております。

近世の絵画で道成寺がどう描かれているかと申しますと、先程の『いそぎ』の挿絵というのが、先ずあげられます。『浄土和讃図絵』という絵入り本が江戸時代に出されています。ここでは日高川のほとりから手をかざして舟が対岸に出て行くのを見ている清姫の姿が描かれています。そこに描かれた清姫の着物を目を凝らして見ると、鱗型の紋様が描かれています。能や歌舞伎で使われるような衣装なので、もう一目で清姫だと分かるような絵に

なっているのです。

私流に言うことが許されるなら、近現代仏教説話画とでも言うべき絵画があります。甲斐庄楠音と読むんですが、彼は「舞ふ（二人道成寺）」という作品（図2）を、大正一三年（一九二四）頃に作っているのですね。久世光彦さんの『怖い絵』の中に登場して来ます。たしかに怖いんですね。数年前に千葉市美術館で展示された折に私も真近で見ました。実物を見た瞬間、もう本当に恐ろしいというかおぞましいというか、女の人の情念みたいなものが強烈に伝わってくる絵画でした。ちょっとOHPが作動しないので、うしろの方には、あるいは御覧いただけないかと思いますが、ものすごく鮮やかな色で、バックが黒いんです。黒いバックの中にオレンジ色のような、赤いような色を使って描いています。久世さんの言葉を借りると、「実は新しい死体だ



図2 甲斐庄楠音「舞ふ（二人道成寺）」 大正13（1924）年頃

けが訴える性感を描いているのではないかと。「性感」というのは、セックスの「性」という字を与えていますけれども、「血が引いていこうとする瞬間」、生きている人体から、死の人体に移っていくその一瞬の驕りを描いたのが、この「舞ふ（一人道成寺）」という作品なんです。あまりにもこういう作品をたくさん描くので、後に土田麦僊によって、画壇を追われることとなります。麦僊は、とても汚い絵だったというふうに言っているんですね。まあ、情念、女の人の、生きている時から死に変わっていく時の情念を表現したものだというふうに言われているものなのです。

次にかぶらぎきよかた 鏑木清方の「道成寺（山づくし）」という二曲の屏風、二つ折りにした屏風に描かれています。昭和四年（一九二九）の作です。鏑木清方は、道成寺物がすごく好きだったらしいんです。歌舞伎で見ていたようでした、翌年



図3 鏑木清方「道成寺道行」
昭和31（1956）年

の昭和五年に描かれた「道成寺」は、ローマで行われる「日本美術展」に出品するための作品で、「驚娘」とセツトの形となっていました。それから、「道成寺道行」(図3)という作品もカラーで見ると本当に綺麗なんです。これは、昭和三年（一九五六）の作で、鏑木清方晩年に描いたものなんです。この他にも道成寺にまつわる絵を

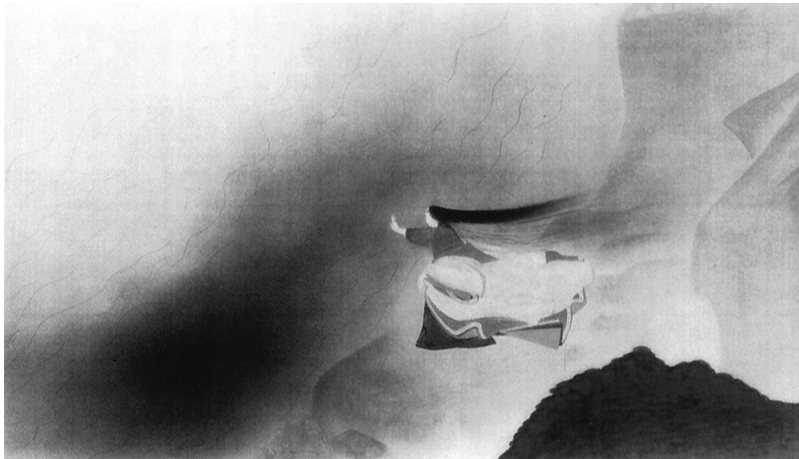


図4 小林古径「清姫」6 日高川 昭和5(1930)年

たくさん描いています。彼にとって道成寺というのは、大変大きな意味を持っていましたよ。

小林古径の「清姫」(図4)という作品は、絵巻物になっていて、全部で八場面描かれているのです。これを、日本画の究極の美というふうに美術史の人々は言っています。空を飛んでいく姿、その下は日高川なのですが、日高川の波立っている中を清姫が空中を飛んでいくという設定で描いており、「竹取物語」という作品とこの「清姫」というのが、彼の中の二大絵巻、傑作だというふうに言われています。ある時期、非常に厳しかった古径のその内面の激しさというものが、この絵の中に描かれていると。官能的な女性の美というものが、それを描き出しているとも言われています。小林古径は、この絵を描く前にちょっと挫折しているんです。即ち、画壇活動の方に力を入れてしまっただけで、絵が暫く描けなかった時期があります。ところが、ある時からこの道成寺に非常に夢中になったと。因みに、先程の鐫木清方の場合も、たまたま大償おおくぐなえ神社の山伏神楽の「道成寺」を見て、これなら自分もまた絵が描けるといふふうに思った時、横を見たら、評論家の小林秀雄が必死になって見ていたと、自分の作を語る文章の中で書いているん

です。

画家にとって、自分が何かもう一回やりたいとか、自分が最期にやらなければいけないような時に、この道成寺を画題として取り上げる傾向があるようです。

とりとめのないまま、与えられた時間がまいりました。この辺で終わらせていただきます。